

＜卒論＞『本朝二十不孝』論：不孝というテーマの 先にあるもの

著者	松永 瑞衣
雑誌名	日本文學誌要
巻	62
ページ	48-59
発行年	2000-07-08
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020121

『本朝二十不孝』論

—不孝というテーマの先にあるもの—

松 永 瑞 衣

はじめに

親孝行なんて言葉は今ではあまり使われないのかもしれない。ところが、忠孝という思想が政治に大きく影響した時代があった。次に挙げるのは天和二年五月に出された触書である。

一、忠孝をはけまし、夫婦兄弟諸親類にむつましく、召仕之者に至迄憐愍をくハふへし、若不忠不孝之者あらハ、可為重罪事^{*1}、

忠孝のすすめのお達しが法令として出されるばかりでなく、違反者には罰がまっているというのである。この触書が出された三年後の貞享三年十一月西鶴の『本朝二十不孝』は刊行された。忠孝が奨励される世の中で、不孝話を集めたこの作品は題名からして一筋縄ではいかない印象を読者に与えるが、実際その内容を見ても孝行物と呼ばれる作品群の中で異色の存在であった。

これまで、『二十不孝』の研究は西鶴の創作意図の把握にほぼ

集中し、その創作意図の研究はまた序文の研究であつたと言っても過言ではない。それぞれについての詳しい説明はここでは省きたいが、『二十不孝』の創作意図をめぐって次の四つに見解は分かれる。^{*2}「孝にすゝむる一助」という言葉を一種のカモフラージュと見てそこに批判や皮肉がこめられているとする孝道奨励政策への反発説。^{*3}その反対に西鶴の言葉をそのままストレートに『孝経』的孝への密着と見る教訓説。^{*4}「不倫な人間の生」態「元禄の社会悪」を描いたとする「悪」の抽出説。^{*5}そして、常識的教訓をいかに面白おかしく語るかが目的だったとするのが戯作説であり、最近はこの戯作説が優勢であると言われている。^{*6}^{*7}

確かに序文が西鶴の創作意図や基本姿勢を示す第一の手がかりになることは間違いなく、それは避けては通れない問題である。しかし不孝話の中にどのような人間や親不孝が描かれ、どこに問題点があるのか、あえてそこを探ってから序文の問題に立ち戻っても大きく道を踏み外すことにはならないのではない

か、と私は考えた。そこでまず、徹底した悪が描かれているとこれまで評される二編を取り上げて、西鶴の人物描写、不孝話の特徴や性格を考察し、その後西鶴の創作意図や作品の持つ意味について論じていきたい。

巻一の二「大節季にない袖の雨」

舞台は山城国伏見の里である。かつては賑わいを見せた伏見の里も今ではすっかり衰微し、そんな町の状況に呼応するかのよう貧しい一家があつて、その家の惣領が主人公文太左衛門である。文太左衛門は家の貧窮をよそに全く働こうとせず、十六の夏には妹を投げ飛ばして死なせ、二十七の年には姦通を論した母を蹴倒し、最後には両親のために妹が身売りした金二十両を盗み出し廓の正月買いで使い果たす。彼の無頼ぶり無反省ぶりは、あたかも不孝を目的として生きているかのようであり、その非道ぶりは徹底している。

しかし、家族に対してさんざん乱暴を働く文太左衛門が、時雨に家族と共に長持ちの中に入って雨をしのぐ姿などは想像すると間が抜けていて、文太左衛門には悪と同じくらい強烈な甘えが潜んでいるのではないかと私は感じる。その上、彼の一つ一つの悪事は悪知恵を働かせるというよりただ力ませに暴れるといった感じのものである。さらに、その矛先は全て家族の者に向けられている。以上の点を考えた時、文太左衛門の振る舞いにはどこか内弁慶的なだらしなさを認めざるを得ない。徹底した悪人として描かれている文太左衛門であるが、甘ったれぶりとそのふてぶてしさは何とも情けなく、読者の嘲笑を浴び

るであろう。

さらに、情けないのは文太左衛門だけではない。彼の家族も同様である。家族の者は文太左衛門の度重なる悪事を正すことも、彼に対して強い態度をとることもできない。妹を投げ飛ばして死なせてしまった時も母親は嘆き悲しんで自分も死のうとするだけであつたし、父親は彼に睨み付けられるままである。姦通は母親に「命の程も」と諭されるが、それに腹を立てて母親を蹴り飛ばしても、誰に責められた様子もない。文太左衛門の乱暴ぶりを考えれば家族が何も言えないのも当然と言えば当然だが、この時代、儒教の忠孝主義を基礎にして事実上戸主に絶対権があつた。刑法上から見れば、親殺しは引き廻しの上、磔。親に手傷を負わせ、あるいは打擲しても磔、斬りかけただけでも死罪は免れなかった。親が実子・養子を罪なくして殺しても遠島で済んだことを考えるといかに親権・戸主権が強かつたかが分かるであろう。^{*}ところがそんな封建的親子関係の理念など文太左衛門にはまるで通用せず、親子の上下関係はすっかり逆転してしまっている。つまり、文太左衛門の野放し状態は、同時に父親の力のなきの露呈を意味するのである。両親としては家出でもしてくれた方がよほど助かるのだが、その気持ちを知ってか知らずか息子は家に居座り、「親仁、世は露の命」と勝手なことを言つて睨み回す始末。その上家は貧困のどん底を行く、となれば両親の姿は哀れで気の毒にも感じるのだが、甘ったれの道楽息子になめられ、身も心も小さくなって暮らす両親の苦悩はそのぼやきが聞こえてきそうどこか滑稽なのである。

では、文太左衛門の眼には家族はどう映っていたのだろう。自分のわがままに黙って耐える家族に何の文句があるかと思うが、文太左衛門は家族や世間に対する抑えがたい不満や苛立ちの塊を抱えているように私には感じられた。そしてそれは理不尽に思える彼の悪事を考察する鍵になるのではないか。

不満と苛立ち

文太左衛門の暴挙に家族は黙って耐えていたが、彼は自分が何をしでかしても向かってこない相手の怯えたような態度に苛立ちを憶えていたのではないだろうか。そしてその募るイライラが彼を不孝行為へと突き動かす要因の一つになっていたと私は考える。家族に恐れられ、疎外される文太左衛門は孤独であり、モヤモヤとした面白くない気分になったであろう。そしてその「面白くない」という気持ちを爆発させるかのように、彼は不孝行為に手を染め、それは誰も止める事が出来なかった。文太左衛門は極貧状態の家に居座り続けていたが、それも彼の（無意識ではあろうが）強い孤独感の表れなのかもしれない。

そんな文太左衛門の苛立ちや孤独感をさらに強くしたものとして妹の存在が挙げられる。この妹は両親をいたわって孝を尽くし、最後は自ら廓に身売りすることを決心するというあまりにできた娘であった。しかし、これは後に詳しく述べるが、親のために身売りするという美談は文太左衛門が最も不信感を抱く対象であり、我慢のならない話なのである。加えて、家に二十兩入ったことを聞きつけて米屋や酒屋がいきなりやって来たことも彼は気に入らなかった。金の力でコロリと変わる人々の

態度によって、金銭の持つ影響力の強さをまざまざと見せつけられた形になったからである。

結局文太左衛門は家からその二十兩を盗み出し、廓の正月買いで全て使い果たしてしまう。妹がこれから先十年勤めなければならぬお金がたったの七日間で消えてしまった。そのあつけなさは文太左衛門の悪事の重さと同時に、金銭のはかなさ、それに振り回される人間の愚かな姿を浮かび上がらせていると言えよう。

巻二の二「旅行の暮れの僧にて候」

「雪やこんく、^{あられ}円雪やこんく」と里の娘達が遊んでいるところへ、熊野参詣の旅僧が山々の難所を越えてやって来る。山里の小さな共同体に突如現れた僧は、ただでさえ異様な存在であるのに、この旅僧は息も絶え絶え、もう動けないといった状態。恐れをなして娘達は家々に逃げ帰ってしまったが、そんな中、大人びた振る舞いでこの僧を家に案内した少女がいた。主人公小吟である。

小吟の「^{おと}長なしき」この振る舞いには、九歳という年齢や小さな山里で育ったという環境を考えると、僧の出現と同様その場にふさわしくない違和感を感じさせるが、旅僧を助ける行為自体は褒めてしかるべきものであった。だから小吟の両親も「小吟が心ざしを思ひやり」旅僧を手厚くもてなしたのである。しかし旅僧が再び出発しようとした際に事件は起きる。この僧が風呂敷包みの中に小判を持っているのを見つけた小吟は、何と両親に「おひとりなれば、人のしる事にもあらず。殺して金を

取り給へ」とささやいたのである。そう言われた親の方も「思はざる欲心おこり」、旅僧を追いかけて金を奪い、殺害する。旅僧を助けた時に見せた小吟の「長^ちなしき」態度に感じた不自然さは、ここでついにその冷酷で残忍な性質を現したのである。

あまりの意外な展開に読者は驚き、戸惑うだろう。また、小吟の両親を通して人間の欲望の恐ろしさや弱さといった、本来見てはいけないものを見せつけられた訳で、読者としてはかなり強い印象を受ける場面である。しかし小吟にとってそれは衝撃的なことでも何でもなかった。なぜなら小吟自身が、山里育ちにも関わらず風呂敷包みの中の小判を嗅ぎ分けるなど、人心のドロドロした部分の化身とも言ったらよいだろうか、異様な存在であり、その内面には悪がはびこっていたのである。

五年後美しい娘に成長した小吟であるが、悪人としての中身は変わらぬままであった。小吟を恋慕う男は数限りなかったが、美貌を自慢するあまり男のえり好みをし、悪評判が立つ。

そして親の言うことなど全く聞かず「この富貴は、自らが智恵付けて、筒様^{かやう}になりける」と脅しととれる発言で両親を困らせるのである。小吟にしてみれば、ふしだらな身持ちに対する世間の評判など取るに足りないものであったが、問題はかつて強盗殺人という重い犯罪に手を染めた両親が自分の身の持ちように意見したということであった。両親がいくら倫理的・道徳的にまともな説教をしたところで、両親がその仮面の裏に持つ強烈な欲望を小吟が知ってしまったという限りそれがなんの説得力も持たず、小吟が全くいうことを聞かないのも当然と言えば当然である。むしろ両親がまともな意見を口にすればするほど

小吟は不信感と嫌悪感を募らせ、反逆的行為を繰り返していたと考えられる。

ここまで、小吟という悪人はその悪魔的要素がどこから表れてくるのか全く説明されていなかったため、不可解で冷血な人間として描かれてきた。ところがこの場面に見せた両親に対する苛立ちや反抗はいわば人間的感情の表れである。そして、この両親と対立する辺りを境に小吟は、同じ悪人は悪人でもその中身というか質が変わっていくのである。一体、小吟という悪人はどのような変化を見せるのであろうか。

小吟の恋について

男選びをして悪評判となる小吟であったがある時「我と男を見立て」る。そこには自分の道を自分で積極的に切り開いていこうとする自主性、独立精神を認めることができるが、その積極性も結局、婚約後の男憎み（女性側からの結婚拒否）という形の親不孝に向かってしまう。小吟のこの結婚に際し両親は色々と力を尽くすのだが、小吟は相手の男の耳にあった「見ゆる程にもなき出来物の跡」を嫌い、平然と婚約を破る。両親の期待と厚意を無にしたその親不孝ぶりは際だつ。しかし、この両親がそれまで小吟を「子ながらもて余しける」状態であったことを考えると、小吟の結婚を応援するその裏には、娘を早く片づけてしまいたいという気持ちが見え隠れしているようにも感じられるし、冷徹で頭の冴える小吟がそれに気付かないはずもないであろう。

さて、婿側への配慮から小吟は在所を追われて腰元奉公へ遣

わされる。そして今度はその屋敷の主人をいつともなく自分のものにしてしまう。それは「奥様の手前を憚らず」「いたずらなもの」と否定的な形で描かれてはいるが、小吟にとっては後に殺人をもあえて意とせぬほどに激しく真剣な恋であった。そしてこの主人への愛は「奥様」との対立というもう一つの側面をもつていたのである。

この奥様は小吟が旦那に手を出しても「世にあるならひ」と知らないふりをし、小吟の恋が激しさを増して家の秩序も乱れるほどになると「世上の取沙汰、思召して」旦那を諫める。結局旦那は奥様の言葉に改心し、小吟との関係を絶つのである。この、奥様の一連の行動は当時の道徳観に見事に沿ったものである。江戸時代の女訓書として最も有名な『女大学』のなかには

一、嫉妬の心努々発すべからず。

一、言葉を慎んで多くすべからず。

一、人の妻と成りては家をよく保つべし。^{*9}

という言葉がある。『女大学』が出版されたのは享保十八年で、『二十不孝』が出版された年より少し時代は下るが、『二十不孝』の時代にも女性と同様の道徳観を求められていた。特に奥様は武士の息女であるからそのような教育をみっちり受けたのである。つまり奥様は当時の封建社会が求めた理想の女性像なのである。

しかし、心の底ではどうであつたか。小吟に討たれながらも『おのれ遁がさじ』と、長刀の鞘はずして、広庭まで、追ひかけ「る姿は、ただ自分の命を狙った者への怒り以上の並々なら

ぬ激しさ――嫉妬や恨みを感じさせる。

では、小吟にとって奥様はどのような存在であつたのだろうか。脇目もふらずに激しい恋心を燃やす小吟と、自分の気持ちを押し殺し世間体を第一に考える奥様のその物わりの良さと賢女ぶりは、当然のごとく真っ向から対立することとなる。そしてそれは、自我を通そうとする女（新しい女性認識）と社会倫理との対立と言い換えることができるだろう。だから小吟にとって奥様は単なる恋敵というのではなく自己存在・自我をかけて戦うほどの相手であつたのである。しかし、旦那は奥様の言葉で目を覚まし、小吟との関係を絶つ。小吟からしてみれば奥様の賢女ぶりも自分の両親と同様、その裏に欲望や激情を隠し持ち、世間体という言葉で盾にきれいに物事を取り繕うとする仮面をかぶった姿であつた。

奥様の寝ているところを小吟は襲い、前もってつくっていた抜け道からうまく行方をくらます。ここで注目したいのは「女には健気に、立退きし」とまるで小吟の悪事を援護するかのような描き方をしている点である。主殺しという悪事を犯した人間になぜ「健気に」という言葉を使うのか。

広末保氏は『元禄文学研究』のなかで『好色五人女』を評して「西鶴はこの悲劇的な話を素材としながらも、悲劇感よりも好色に生きぬこうとする町女の積極的な解放感をもかもしだしている。そこでは好色と同時に、好色という世界を通してあらわれてきた町女の新しい性格が描きだされている。少なくともその瞬間においては、女は生まれ変わってきているように感じられる。^{*10}」と述べている。

作品は違ふがこれと同じようなことが小吟に対しても言えるのではないだろうか。小吟が重ねる反逆的な行為は既存の価値基準への挑戦であり、たとえそれが誇張が過ぎるくらいがあつても、そこから新しい女の姿が現れてくるのである。だから小吟はあくまでも堂々と悪事に手を染め、そこには突き抜けたリリシささえも感じられるのである。ここにはもう九歳の頃の冷酷で不気味な悪魔のような印象は全くない。ここに立ち現れてゐるのは、感情をあらわにし、自我の道を突き進んだために世間の枠から外れて悪人と称される女の姿なのである。

西鶴の描く悪人とは

「それは余りにと云う程徹底していた。病的という方が本統かも知れない。彼は若し自分が書くことすれば、あゝ無反省に惨酷な気持を押通して行くことは、如何に作り物としても出来ないと考えた。親不孝の条件になる事を並べ立てて書く事は出来るとしても、それをあの強いリズムで一貫さす事は却々出来る事ではないと思つた。(中略)実際西鶴には変な凶太さがある。」^{*11}

これは志賀直哉が『暗夜行路』のなかで『二十不孝』の最初の二編について述べた言葉である。ここで注目したいのは「強いリズム」と「凶太さ」である。『暗夜行路』の主人公時任謙作は、家庭内の苦勞に衰勞した心境にあつてその凶太さを耐え難いものと感じているのであるが、しかし西鶴の描く強いリズムは単にそのような否定的な暗さだけを感じさせるものなのだろうか。

私は文太左衛門と小吟、二人の悪人を取り上げたが、彼らだ

けでなく他の悪人にも共通する特徴として、彼らの姿は惡の側から徹底的にはあるが、奔放に時には小吟のようにりりしくたくましく描かれている事が挙げられる。それは確かに志賀直哉の言う強いリズムと凶太さに違ひないが、その破壊的とも言ふべき言動から生じるパワーは堪えがたいといったものではなく、むしろその強烈さは抗いがたい力で読者を惹きつけてゐるのではないだろうか。少なくとも私はそのように感じた。もちろん、『暗夜行路』に見られる志賀直哉の指摘は西鶴の悪人描写の一つの側面である冷酷さを鋭く言い当てたものであるが、非情さ・冷酷さだけでは西鶴の悪人描写の全てを解決することは出来ないと思われる。悪人達には非情さと同時にそれとは相反する滑稽味も認めることが出来るからである。

そして滑稽味も結局のところ描写の徹底から生じてゐる。この、描写の徹底に関して岩波文庫の解説は次のように指摘する。「西鶴は、微妙な心の陰影を宿するような悪人を、一人も描いていない。それは単に、惡を製造する機械のように見える。」^{*12}だがしかし、小吟は両親への反発や旦那への恋、奥様への恨みと、激しい感情を顕わにしていたし、文太左衛門も妹の孝行ぶりに苛立ちを感じていた。また、巻四の一「善惡の二つ車」には源七と甚七という二人の放蕩息子が登場するが、途中で源七は改心しそれを「却^{かへ}つて、甚七嫉^{あは}み」とある。不孝という惡縁が絶たれ、一人孤独に陥つた甚七の心理的屈折をこの「嫉む」という一語はよく表している。彼らの感情表出は極端かつ激情的でもあるので、それは確かに「微妙な心の陰影」には程遠いかもしれない。『二十不孝』は説話文学であり、説話文学の特徴として

は話の筋を重視する即時即物的姿勢があるのだが、しかし西鶴は決して登場人物の心理描写を捨象している訳ではなく、悪人達の心の動きを作品中に認めることはいくらでも可能なのである。

さて、巻四の一に見られる「嫉む」という屈折感も文太左衛門や小吟が感じたものと同じ「良い子」「美談」的なものに対する不信感と苛立ちと考えていいだろう。彼らの抱く不信感、悪人達の側に立つて考えればそれはこういうことになると思う。善と悪の判断基準なんてものは一つに定めることは出来ない。それをきれいに真つ二つに割ってしまうと、善は善だから何をやってもいいという、相手に反論も警戒の余地も与えない一方通行になりかねない。下手したら善が悪を駆逐する危険性だつてあるのである。その時々で、善が絶対に正しいと誰が断言できるのであろうか。

この不信感に突き動かされるかのように、悪人たちは善なるものに敵意を顕わにし、己の主張を押し通す。それを可能にしたのは彼らの我執の強さに他ならない。彼らは実に己に忠実に、本能の赴くままに生きようとしており、それは力強く、迷いが無い。「凶太さ」を問い詰めていくと自我への固執に行き着くのだと私は思う。遊んで暮らしたい、働きたくない、金が欲しい、人にうるさく言われたくない。このように並べてみると彼らの欲求は単純明解である。しかしながらそれは如何せんストレートで原始的欲求過ぎるのである。人は、努力と我慢を繰り返して自己と他者との微妙なバランスを保ちながらこの社会に存在しているはずなのに、悪人たちは自分が全て、自分しか頭にない

のである。常人の真似できるところではない背徳行為を繰り返す彼らは、読者の側からすれば完全にずれている。

私は彼らが抱える屈折感や不信感について指摘し、その核の部分はわずかであるが理解できる範囲にあるとも述べた。しかし、悪人たちと読者は相交わることが出来ない。彼らが主張する欲求は本来誰しも心の奥に抱えているものなのかもしれないが、普通の人間は倫理観や常識といったものが障害やブレーキとなり、欲望を社会生活の中で直接表し、実行に移すなんて事はしない。これが、自分以外の他者の存在を無視して生きる悪人たちとの決定的な差である。

この差が、読者と悪人たちとの間に深い溝、見えない壁というズレを生じさせる。そしてそのズレが大きければ大きいほど、つまり悪人たちの行為が常軌を逸し、その冷酷さが強ければ強いほど、読み手の理解を超えた彼らの我欲の追求は何というか漫画的に映り、滑稽に感じられるのである。

例えば文太左衛門が妹を殺してしまう場面は「十六の夏の夜、妹に、あふがせしに、いまだ七歳なれば、手先に力なくて、^{うち}団の風もまだるきとて、首筋逆手さかてに取つて抛なげしに、庭なる碓のうへに、あられなくあたりて、息絶え、脈に頼みなく、当座に露と消えしを」と、悲惨である。しかし私は初めてこの場面を読んだ時、思わず笑ってしまった。勿論笑う場面ではないと思つたが、一気に妹をぶん投げた文太左衛門の豪快さ、またいとも簡単にヒューという勢いで投げ飛ばされてしまった妹の姿は想像すると劇画調であり、笑わずにはいられなかったのである。暗く、冷たい描写であるはずなのに何だかおかしい。これが

『二十不孝』における滑稽味の大きな特徴の一つであると私は考
える。不孝話には冷酷な暗さが前面に出ており、親の立場を考
えればやりきれなくも、暗い気分にもなるであろう。ところが
実際には読者はまず彼らの無謀ぶりに圧倒されてしまう。同時
にそこに埋めようのないズレを感じる。結果、指摘したように
悪人たちの暴挙は漫画調の仰々しさを醸し出し、読者にはそれ
が対岸で繰り広げられる喜劇のようにも感じられる。

このような大きなズレを感じつつ、しかし私は悪人たちの恐
れを知らない無反省な態度から目を離す事が出来ず、それに引
き込まれもする。結局それは悪人たちと同じ強烈な我欲を私自
身持つているからであり、西鶴の人間洞察力が如何に鋭いかを
思い知らされる。西鶴は、悪人達を通して人間の心に内在する
生々しい欲望や本能の恐ろしさを見事に浮かび上がらせた。そ
れを笑ってしまうというのはどんなに澄まし顔で生きていても
人間はそれだけ可笑しくも恐ろしくもある存在ということでは
ないだろうか。

注意しておきたいのは、悪人たちが現実世界を無視して生き
ているからといって、『二十不孝』という作品全体に現実感がな
いという訳では決してない。西鶴は経済問題や時勢を、悪人た
ちが破滅に至る過程の中に巧みに取り入れ、現実性を作品に与
えることを忘れてはいないのである。

不孝話の中の金銭問題

作品の現実性に関して、不孝話に現れる金銭の問題について
考えてみたい。先に考察した二編でも話の筋に金銭問題が大き

く絡んでいて、僧から奪った金によって小吟の家は牛を専有し
て飼うほど裕福になった。文助一家の貧困は伏見の町の経済衰
微を背景としており、その極限の貧しさから両親を救おうと妹
は身売りするのである。ではここで、序文の冒頭の一節の解釈
の問題も照らし合わせて考察していこう。

雪中の筭八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり。世に天
性の外祈らずとも、それ／＼の家業をなし、禄を以て万物
を調べ、孝を尽せる人、常也。

御伽草子『二十四孝』で三国時代の呉の孟宗は、母のために
雪中に竹の子を求め、天に祈って得たと言われているが、今で
は八百屋に行けば何の苦もなく買える。同じく王祥は継母のた
め冬の凍った川に魚を求め、衣を脱ぎ裸になって氷の上に伏し
たところ、魚二つ躍り出たと言うが、それも今では魚屋の生け
簞にいくらでもある。西鶴は奇跡を求め、天の恩恵を期待する
ような不合理な二十四孝的な孝を批判し、自分の職業に励み、
生活を豊かにして親の望みを叶えるべきであるという近世の合
理的・現実的な孝行を説いているのである。西鶴はすでに延宝
五年五月興行の『大句数』において

一子寒し親孝行の袖の月

どこにあらうぞ雪の筭

と孟宗の故事に批判的な言辞を残している。^{*13}そして西鶴のこの
現実主義は作品中に特に金銭問題に絡んで見受けられるのであ
る。文太左衛門の妹はじめ「湯茶をも汲みて、孝をつくし」
ていたが、そのような孝行で暮らしが上向くはずもなく、妹に
できる一番の親孝行は廓に身売りをするのであった。孝を尽

くす健気な妹にも現実社会の厳しさを容赦なく叩きつけ、金銭の問題は奇跡や祈りでは解決しないことを西鶴は作品中で明確に論じているのである。さらに、両親の方もはじめは娘の身売りを嘆くもののすぐに「銀程自由なる物はなし」という言葉を口にしている。娘がくれた二十両で年が越せるという喜びと安心感から出てきた言葉なのであるが、この言葉の意味するところは実はもっと複雑である。つまり、貧困にあえいでいた一家はそれまで自然と周囲の人たちからも疎遠になっていたと想像される。そこへ、二十両手に入れたことを聞きつけて商人達が文助の家に次々とやって来る。家は久々に賑やかな様子になったのであろう。商人達は無論商売が目的だが、文助にしたら今まで何となく自分から離れていた人心までもがまた自分のところに戻ってきたというように感じられたのではないだろうか。二十両手にしたことによって、一瞬の間ではあるが、彼らは物的な貧しさだけでなく、精神的にも寂しさや孤独感から解放されたのである。商業主義時代においていかに人心と金銭とが強く結びついているかが浮き彫りになっていると言えるだろう。

「全二十話中九話までが、金銭を原因とする不孝譚である。」^{*14}という指摘があるほど金銭問題は話の構成に重要な役割を占めている。それはやはり西鶴が庶民の生活における金銭の持つ影響力の強さ、個人の人生を左右するまで財力が大きく関係するという事実を強く意識していたからに他ならない。

さて、悪人描写と不孝話における特徴や流れについてみてきたが、描写に徹底した冷酷さを買きつつ、そこに浮かび上がる

のは喜劇的な人間の実態と、現実的な金銭問題である。ではそれらは不孝テーマを掲げた西鶴の本当に意図するところであったのだろうか。序文に焦点を当てて西鶴の創作意図、不孝というテーマの意味について論じていきたい。

序章について

雪中の筭八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり。世に天性の外、祈らずとも、それ／＼の家業をなし、禄を以て万物を調べ、孝を尽せる人、常也。此常の人稀にして、悪人多し。生きとしいける輩、孝なる道をしらずんば、天の咎を遁がるべからず。其例は、諸国見聞するに、不孝の輩、眼前に其罪を顕はす。是を梓にちりばめ、孝にすすむる一助ならんかし。

先述の通り、序章の冒頭部分で西鶴は、奇跡に依存するような『二十四孝』的な孝を否定し、日々の地道な営みによる利益で孝行を実践することを説いている。

ではここで、『二十不孝』が出版された時代の流れを見てみよう。時の將軍綱吉は、政道に熱心な好学の人であった。特に彼は『孝経』を熱烈に信奉し、生母の桂昌院に対して孝心が篤かったことはよく知られている。彼の孝心の追求は政治的施策にも表れていて、天和二年五月、諸国に忠孝奨励の高札いわゆる忠孝札をたてさせ、孝子の表彰につとめている。翌天和三年七月には武家諸法度の第一条が「文武弓馬の道、専ら相嗜むべき事」^{*15}から「文忠孝を励し、礼儀を正すべき事」に改訂されている。

そんな綱吉が信奉した『孝経』は儒教經典の一つである。その『孝経』の中で農工商の孝を説く「庶人章」では庶人の孝を「用¹⁶天之道、因¹⁶地之利、謹¹⁶身節用、以養¹⁶父母、此庶人之孝也」と規定している。¹⁶「天性の外祈らずとも」という西鶴の言葉は天性に従うことを主張する『孝経』の言葉を言い換えているにすぎず、その孝のイメージは『孝経』にかなり接近したものであるように思われる。しかしだからといって、西鶴が幕府の孝道奨励路線に対応して大真面目に孝を説こうとしていると考えるのは早急である。第一、私は二つの親不孝話を取り上げたが、それを読んで真剣に我が身を振り返りながら親孝行について考えるなんて事があつただろうか。いや、悪人たちの徹底ぶりに圧倒されっぱなしであつたではないか。

西鶴は孟宗や王祥が奇跡的に得た珍物は、金銭で解決できる問題であると皮肉っているが、日本古典文学全集の解説が指摘するところによるとこれは反体制的とはいわぬまでも反法令的な態度であるという。¹⁷幕府は、町人達の初物買いによる物価上昇を抑えるために、貞享三年五月、たけのこやびわなどの季節商品の発売期日を規定し、それ以外の時にその品を扱うことを禁止するいわゆる「初物禁止令」を出している。『二十四孝』の孝人達が親孝行のために求めた季節はずれの品々を金銭次第で手に入れることは可能であるが、それを実際にやってしまったらいくら孝行のためとは言え幕府の基本的財政方針に対立する事になるというのだ。儒教的現実主義・合理主義の上に立ちつつ、庶民的政治批判の目を光らせることを西鶴は忘れていないということである。

では、西鶴の創作意図は「孝にすすむる一助」という言葉を一種のカモフラージュにして、綱吉の孝道奨励政策に対する反逆の姿勢を示したとする説が正しいのであろうか。いや、時代や社会に対する反逆の姿勢というといささか行き過ぎの感が拭えない。

しかし、孝道にまつわる政治的動向とそれに追隨する動きを見せる当時の出版界の風潮を西鶴が強く意識していた事は間違いないだろう。そもそも、御伽草子の『二十四孝』は、元の郭居敬の撰述にかかる『二十四孝詩撰』に拠るものであり、これが和訳されて一般に流布されたのは、室町中期より後のことといわれている。¹⁹中世から近世にかけて儒教道徳が普及するにつれて、こうした孝子譚がもてはやされたのである。特に近世に入ると、印刷技術の発達に伴い、仮名草子の類書が続々と刊行されるようになる。『孝行物語』、『大倭二十四孝』、『本朝孝子伝』などがそうで、出版界の孝行ブームといわれる所以である。²⁰暉峻康隆氏は『二十不孝』執筆刊行の動機を、そのような出版界の時流に便乗しようとした大阪出版界の商売魂と指摘している。²¹だが単なる商魂だけでなくやはり西鶴という作家を不孝というテーマに動かしただけがあるはずである。

私は、むやみやたらと孝道を鼓吹するような政策や社会風潮、それに追隨し、煽り立てるかのようになつたと孝行物を刊行する出版界の動向に西鶴が感じていたのは一種の居心地の悪さではなかつたか、と思う。無論、常識的な見地からして親孝行に否定や批判の余地はないし、西鶴も孝行自体を否定している訳では決してない。ただ、言ってみれば子が親に尽くすというのは

当然の行為であり、それを奨励したり、ましてや表彰したりするのはどこか不自然な感じがするのである。実体を見失って膨れ上がる孝行思想の危うさを西鶴は鋭く見通していたのではないだろうか。また西鶴は、善意に満ちた美談や教訓が読者の心を捉える力の弱さとその影響力の限界も見透かしていたに違いない。美談も時には必要かもしれないが、はつきり言ってそればかりでは退屈なのである。

序文の残りの部分の解釈に進んでいこう。

此常の人稀にして、悪人多し。生きとしいける輩、孝なる道をしらずんば、天の咎を遁るべからず。

西鶴は、勤勉に家業に励めば自然と家は栄え、それがすなわち親孝行につながると考えている。と言うより、西鶴が最も重要視しているのがこの勤勉と日常的努力であり、それが出来ない者を「悪人」と指弾するのである。その上で、不孝という悪は必ず天によって罰せられるものと説く。確かに、文太左衛門の最後は両親の死骸を喰った狼になぶり殺され、狼は文太左衛門の骨を人の形に並べてその死に恥をさらしたという残忍かつ悲惨なもので、序文の内容に即した恐ろしい天罰が描かれているように見える。

しかしながら、作品全体を見てみると、主人公たちの末路は破滅や恥さらしといった勧善懲悪的な傾向で一貫しているものの、文太左衛門の場合のように天罰の摂理といった描写が全面に出ている作品は意外に少なく、それよりも主人公自身の意識的行為の失敗や挫折、世間から強い非難や指弾によってそれぞれの最後がもたらされた話の方が多いのである。小吟の場合が

まさしくそれで、小吟は彼女の逃亡によって入牢させられた両親が処刑された翌日に「親の様子を聞きて、隠れし身をあらはし」打ち首となつてゐる。小吟は自ら姿を現し、主殺しの罪で役人に罰せられるという現実社会のルールに則した裁きを受けているため、そこに天の咎といった印象はほとんど感じられない。また巻一の三「跡の剥げたる嫁入長持」では、何不自由なく育てられた町家の娘が何度も結婚と離縁を繰り返して悪評判となる。主人公の行動は道に外れたことと指弾され、髪のお油を売って生計を立てようとしても噂を聞き伝えて誰も買う人がいないために暮らしていけなくなつており、世間からの非難の強さによつて一人の人間に破滅がもたらされている。

西鶴の言う「天の咎」に儒教的なイメージが込められていると考えると、実際の結末（現実的な裁き）と、食い違いが生じてしまうようである。いったい西鶴の考える「天の咎」とは何なのだろうか。

高尾一彦氏は、西鶴の使う「天」「天命」などの言葉は「用語概念は朱子学もしくは儒学からかりているが、その内容は庶民的経験をもりこんで異質のものに転化してしまつてゐる」という。高尾氏によると、西鶴の「天」「天理」なる語の実質的な内容は、人情であり、人情とは庶民的倫理的共感を指すのだという。庶民的倫理的連帯感とはつまり、日常においてお互いに認識し共感しあうところに成立する庶民世界の評価とでもいうべきもので、その庶民的な内容は、どんなに強弁しても士大夫の学である観念的な朱子学とは何の関係もないのである。そして、庶民的寛容さにおいても否定される反倫理的行為を、西鶴は『日

本永代蔵』の巻四「茶の十徳も一度に皆」の中で具体的に述べている。「工て置捨の質物」「万の似物」といった詐欺。「人参のつき付」「筒もたせ」のような恐喝。「敷銀の付女房をよび」「博奕中間」のような不労所得行為。「犬釣」「川流れの髪の落取」などのような不人情な非人間的行為。以上挙げたような反倫理行為が、庶民大衆の新しい寛容な倫理的連帯感を成立させている外側の否定要素である。氏の言うように「天」という言葉が庶民の倫理意識を示しているのならば、『二十不孝』の悪人たちの行為も間違いなくその倫理的連帯感の範囲の外にあり、彼らが世間の非難や指弾という現実的裁きによって破滅するのは当然の結果と言えるだろう。

不孝というテーマの先にあるもの

西鶴の創作意図は決して政治批判や時代に対する反逆といった大それたものではなくて、生きることの基礎・勤労の重要性を、それが出来ない人間を描くことで逆説的に描く事であった。労働意欲の欠如はすぐさま貧困・没落に結びついてしまうという厳しさがあったからである。西鶴は、社会風潮と当時の出版界の動向を冷静に見つめ、そこに不自然さを感じていた。ただし、西鶴の感じた違和感とは本質的なことを見失っている孝道奨励に対してではなかったと私はみている。実際作品を書く段になって、西鶴の意識はさらなる広がりを見せることになったからである。私は、文太左衛門にも小吟にも「不孝者」ではなく「悪人」という呼び方を使ってきた。西鶴も「常の人」の対象として「悪人」という言葉を用いている。親不孝は突き詰

めれば働かないことだが、西鶴の描く不孝は明らかにそれだけでなく、先に指摘したような犯罪・不人情行為が加えられている。つまり、西鶴の感じた違和感とは、深層部では善悪についての考察に行き着いていたと思われる。それについては今後引き続き考えていきたい。

- 注1 『国史大系徳川實紀第五篇』吉川弘文館
 - 注2 『西鶴必携』谷協理史編 学燈社
 - 注3 『岩波講座 日本文学史』西鶴と西鶴以後「野間光辰 岩波書店
 - 注4 『中村幸彦著述集5』西鶴における創作意図の推移」中村幸彦中央公論社
 - 注5 『西鶴 評論と研究』暉峻康隆 中央公論社
 - 注6 『西鶴研究序説』『本朝二十不孝』論序説」谷協理史 新典社
 - 注7 注2に同じ
 - 注8 『時代考証事典』稲垣史生 新人物往来社
 - 注9 『江戸の女ばなし』西岡まさ子 河出書房新社
 - 注10 『元禄文学研究』広末保 東京大学出版会
 - 注11 『暗夜行路』志賀直哉 新潮社
 - 注12 岩波文庫『本朝二十不孝』解説 岩波書店
 - 注13 注12に同じ
 - 注14 日本古典文学全集『井原西鶴集2』解説 小学館
 - 注15 注12に同じ
 - 注16 注6に同じ
 - 注17 注14に同じ
 - 注18 注3に同じ
 - 注19 注12に同じ
 - 注20 注12に同じ
 - 注21 『西鶴新論』『男色大鑑』の成立」暉峻康隆 中央公論社
 - 注22 同時代ライブラリー『近世の庶民文化』高尾一彦 岩波書店
- なお、本文引用は全て日本古典文学全集『井原西鶴集2』（小学館）によった。

（まつなが みずえ・二〇〇〇年卒）